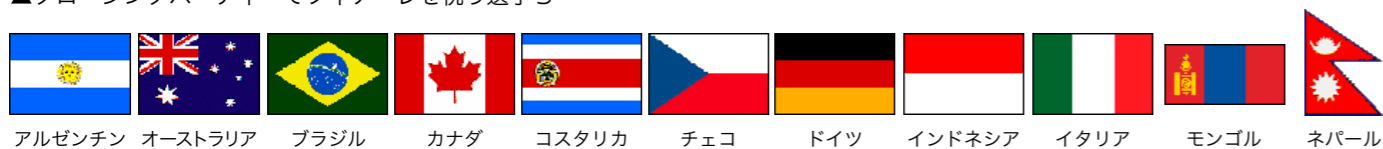


IRF WORLD RAFTING CHAMPIONSHIP 2017 JAPAN ラフティングで世界とつながる

世界屈指の激流「吉野川」。
10月3日〜9日、日本で初めて開催された「ラフティング世界選手権」。
アジア、欧州、中南米などを含めた22か国の代表500人余りが激流に挑み、期間中約2万人が観戦に訪れました。三好市で世界一の栄光を目指し夢と感動を与えた選手の雄姿や応援するサポーターらの笑顔、国際色豊かな現場の雰囲気レポートします。



▲クローズングパーティーでフィナーレを祝う選手ら



世界22か国の代表選手らが三好市へ

10月3日、世界屈指の激流「吉野川」中流域を舞台に国内初の「ラフティング世界選手権2017」が開幕。JR阿波池田駅前ではオープニングパレードが行われ、黒川市長や世界ラフティング協会のジョー・ウィリー・ジョーンズ会長を先頭に22か国の代表500人余りが行進。駅前通りには市内の中学生をはじめ1800人を超える観客が詰めかけ、参加国の旗を振ったり選手とハイタッチしたりして、会場は割れんばかりの歓声と熱気に包まれました。

開会式では黒川市長が「選手の皆さんを大歓迎いたします。市民一丸となって、世界一の思い出に残る大会にしたい」とあいさつ。ジョーンズ会長からは、「大自然の中、トップクラスの選手が繰り広げる戦いに熱い声援を送ってほしい」と市民らに呼びかけました。

世界屈指の激流で繰り広げられた熱戦

22か国71チームが参加したこの大会。年齢や男女別に8

つのカテゴリーが用意され、三好市からはオープン女子に吉野川を拠点に活動するザ・リバーフェイス、ユース男子と女子の部には地元の中高生らで結成されたトラクトが出場し熱戦を展開。

競技初日の6日には、1艇ごとに約300メートルの激流を下る「スプリント」と2艇が同時にスタートする短距離トナメントの「H2H」が行われ、ザ・リバーフェイスは2種目を終えトップに立つ好スタートを切りました。

7日と8日には、規定のゲートを順番通りに通過しタイムを競う「スラローム」、大会最終日の9日には、長距離を下ってタイムを競う「ダウンリバー」が行われ、ザリバーフェイスはニュージーランドとの最後まで一瞬も気の抜けない一騎打ちを制し、2010年オランダ大会以来の2度目の世界一に輝きました。

各国の選手らが口々に語った吉野川の魅力。今回の世界大会は、ウォータースポーツのまち三好市を世界に発信する未来への大きな一歩となりました。来年は11月にアルゼンチンで開かれます。



写真 ⑥ スラロームの種目でゲート突破するマスターズ女子のSakula。⑦ 大会中、セーフティの皆さんをはじめ毎日120人のレース関係者が奮闘し選手らは安心して競技に集中。⑧ スプリントの種目で首位となったユース男子のトルコチーム。⑨ ダウンリバーの種目で首位になったジュニア女子のチェコチーム。⑩ H2Hの種目の熱戦を間近で見守る観客ら。⑪ ダウンリバーの種目で5艇一斉にスタート。



写真 ① ダウンリバーの種目で首位となったオープン女子のザリバーフェイス。② スラロームの種目で巧みなパドル捌きを見せたマスターズ男子のR6Masters。③ 開会式で東祖谷中学校の生徒が祖谷衆太鼓を披露。④ 競技前に安全確認をする自衛隊と消防隊員ら。⑤ 選手を応援する各国の観客。



世界の強豪が吉野川に集結 激流でつながる

吉野川の中流域で4日間の熱戦が、繰り広げられました。6人の選手が呼吸を合わせ、コースを読みながら懸命にパドルを漕ぐ姿に、観客らも割れんばかりの歓声が山あい響き渡りました。各カテゴリーが健闘する中、「スプリント」「H2H」「スラローム」「ダウンリバー」の全種目を制し総合優勝を果たした、ユース男子トルコチーム、オープン男子ブラジルチーム、そしてマスターズ男子日本チームのR6Mastersには庄巻、他を寄せつけない強さを見せつけました。また、吉野川を拠点に活動しているザリバーフェイスが地元期待に見事応え、H2Hと一番得点の高いダウンリバーを見事制し、地元で悲願の総合優勝を果たしました。大会終了後には、ライバル同士で健闘を称え、あちらこちらで握手や喜びを分かち合う選手らの姿が見られました。



1年間の練習はあつという間で、冬場の水の冷たさは格別でした。世界を目指すとは簡単に言えるが、いろんな積み重ねがあつて世界一になれる、本当の厳しさを知ることができてよかった。また、ラフティングを始めたことでこんなに素晴らしい景色が三好市にあることに気づくことができました。世界に誇れる場所だと言えます。水面はすごく澄んでいて綺麗。水量によつて変わる景色が新鮮です。どうアピールをしていけるか考えています。

世界選手権を終えて、学んだことは――

サッカーを目的に入学した高校生活。怪我でサッカーができなくなつて打ちひしがれていたとき、竹村監督や阿部コーチがこの世界選手権を紹介してくれた。サッカー以外に打ち込めるものがないと思つていたときにこんなスポーツがあると知り、レースが終わつた今、あの時の感動と興奮を思い出ししています。絶対に負けたくない気持ちにさせてくれる魅力がこのスポーツにあると感じています。

ラフティングとの出会いは――

トラクト (男子)

三好市内の高校に通う7人チーム。H2Hの種目では決勝で惜しくもトルコに敗れたが、堂々の銀メダルを獲得。

初めての世界選手権



トラクト (女子)

三好市内外在住の中高生7人チーム。スラロームの種目ではチームワークを発揮し、銅メダルを獲得。

世界の強豪と戦う

ラフティングの魅力は――

監督と出会い、ラフティングの楽しさを知つて、たくさんの人と出会えるのがラフティングの魅力。今回の世界大会では、日本は1つとみんななで声を掛けあつてきました。また、海外のチームはライバルでありながらも互いに励ましてくれて、くやしい気持ち、嬉しい気持ちはそれぞれあるけど、レースラフティングをやつてよかった。ラフティングを続けたいので、監督、阿部コーチにはこれからもご指導をお願いしたいです。

初めての世界選手権出場。今の気持ちは――

やりきつた気持ちでいっぱい。くやしい結果だけど、みんなの力を出し切れて本当によかつたです。世界の強さを感じるいい経験ができました。初めは、メンバーが足りず大会に出ることすら危ぶまれたが、後から入つてきてくれた中学生のメンバーが厳しい練習にも食らいついてきてくれ、チームには本当に感謝しています。また、応援してくれた人、支えてくれた人、そして竹村監督には本当に感謝しています。



ザ・リバーフェイス

三好市を拠点に活動しているオープン女子チーム。2010年オランダ大会で総合優勝を果たす(4人制)。今回、地元開催の世界選手権では、悲願だった6人制で見事総合優勝を果たす。

世界の頂点に輝く

- 地元吉野川で悲願の優勝 -

地元での開催。プレッシャーはありましたか――
レースで自分たちの力を出し切つて負けたくらうがなという気持ちで挑みました。プレッシャーをはねのけ、見事総合優勝を果たしての思いは――

近所の人や応援してくれた地元の人たちがラフティングを知つてくれて地域が盛り上がりたかったです。それが活動してききました。それが応援してくれた人への恩返しと思ひ、やつと今回の優勝で形になつてきたと思ひます。これから若い子たちとともにラフティングを広めていければと思ひます。ラフティングを通して、これからの未来ある子どもたちが、生き生きとしてくれることが地域の活性化につながる。また、今大会を機に、吉野川やラフティングの魅力为全国、世界中の方に知つてもらおうきつかけとなりました。今後、移住者が増え、三好市が活性化することを願つています。



R6Masters

三好市在住の八木澤さんを中心としたチーム。全種目1位と圧倒的な強さを見せつけ、総合優勝を果たす。

圧倒的な強さを見せつけ今後の活動は――



テレビで見て、応援するために急いで千葉から駆けつけました!!
【千葉・三好市在住】

地元でこんなにたくさんの外国人を見たのは初めて! 【三好市在住】

世界選手権があると知り、子どもたちに見せてあげたくて。【徳島市在住】

Wrapped in a smile
笑顔に包まれた世界選手権

世界選手権で、職場の仲間を応援できたことを誇りに思います。【三野田中病院】

渓谷が美しい! 世界選手権をこんなに間近で見ることができて興奮しました。【千葉、東京在住】

大会運営がとてもきっちりで、スムーズに試合を行うことができた。また、日本の食事はとても美味しい。【ブラジルチーム】



▲第1回大歩危リバーフェスティバルの様子

郷土の誇り 吉野川の魅力をこれからも伝えていきたい
私は本当に川が好きで「川のほとりで仕事を始めたい」「皆で吉野川の魅力を楽しみたい」そんな思いで専業主婦から2004年、観光拠点施設「West・West」をオープンしました。そして吉野川の魅力に惹かれ移住してきたリバーガイドさんたちとの出会いが2008年の「第1回大歩危リバーフェスティバル」開催につながりました。実行委員会のメンバーからは「この川は世界の名だたる川である」といつも言ってくれていたのです、「このイベント

夢が現実に - ラフティング世界選手権開催を目指して -

始まりは大歩危リバーフェスティバル ～情熱が未来につながる～



西村 洋子 さん
世界選手権ローカルディレクター (副幹事)、WEST WEST 代表

トを通じて吉野川の魅力を世界に発信したい、世界大会を開催したい」という思いが込み上げていました。2014年にはさまざまな関係機関の皆さま方のお力が結集し世界大会開催に立候補することができました。大会を終えて、海外の選手からは「美しく夕陽の川、三好市の方々のおもてなしに大変感謝している」との声をいただきました。パレードでは子どもから大人まで皆が迎えてくれたこと、お別れの時日本の旗を力いっぱい振ってくれた姿、皆さんの方のお力を借りて大会が運営できたことを実感し涙が溢れるほど

うれしかったです。素晴らしい成績を収められた日本代表選手の皆さん、遠い国から代表選手としてきてくれた選手の皆さんに褒めていただいたこと、感謝の気持ちを言いたくありません。三好の過疎地でこんな大きな大会が官民の力でできたことは行政とともに市民にとっても誇りです。来年にはウエイクボードの世界大会が開催されます。1つの川で2つの世界大会を開催できる所はどこにもありません。これからも世界レベルの自然を生かしたまちづくりに貢献し県内外や海外から皆さんに訪れてもらいたいと思っています。

ボランティアから一言 ～ volunteer's voice ～



阪南大学4年生の皆さん (全17名)

言葉が通じる通じないに関係なく、選手に説明していると携帯のアプリを使いながら一生懸命聞いてくれて、本当にうれしかったです。また、イギリスの選手が吉野川の水は、緑が濃く、水面に写る山や岩の景色が素晴らしく、こんなに美しい景色を見るのは初めてだと三好市を褒めていただき、この地域をとっても誇らしく思いました。



国際ワークキャンプボランティアの皆さん

ロシアチームの通訳時に「ここは素晴らしい自然に恵まれて、大会運営もよく競技に専念できた」と言っていました。私も参加して、人がすごく優しくて、ご飯も美味しく、日本に住みたいと思いました。【ロシア在住：エカテリーナさん】
ドイツのハンブルクとは違い山と川に包まれて自然が素晴らしい。皆さんがとても親切で日本は4度目ですが、初めて来た三好市が好きになりました。【ドイツ在住：マーガレットさん】